

八月二一日(月)

上映時間の兼ね合いで食べ損ねたお昼を、半券でちよつとだけお得に食べた。家族で出かけると選ぴがちな中華も、一緒に食べる相手が違うと新鮮味があつていい。普段は注文し辛いサイドメニューも頼んでしまった。

ちよつと食べ過ぎた気もしつ、下へ降りる前にお手洗いに入る。用を済ませ鏡に写る自分の顔を見ると、いつも通りの化粧つ気のない地味な顔。食べた後の汚れや崩れも特にない。しつかり手を洗つて出ると、哲朗さんはトイレを出たところにあるクレイニングゲームを眺めていた。

私が「待った？」と訊くと、彼は首を横に振つた。そのまま、横に並んでいるクレイニングゲームを一つ一つ眺めていく。

「何か、欲しいものでもあるの？」

「ぜんぜん。うわ、まだこのキャラクター現役なんだ」

彼が満面の笑みを浮かべて指を差した大きなぬいぐるみは、私もどこかで見覚えがある。十年、それより前から居るような気がする往年のスター選手。最近の人気アニメのグッズやら、クレイニングゲーム限定つぽいお菓子を混ぜつて、海外アニメの人気キャラクターやら、某ゲーム会社の敵キャラ、ネコつぽいキャラクターのご当地つぽいものまで色々並んでいる。

グルグル回るお菓子をキャッチするゲーム機やメダルゲームの間を縫つて歩きながら、哲朗さんは小さく頷いた。特に未練もないらしく、スツと下へ降りるエスカレーターに乗つた。置いて行かれないように、私も後に続く。

「遊ばなくても良かったの？」

「ああ、うん。眺めてるのが楽しいんだよね」

哲朗さんはとても楽しそうに笑う。

「色んな思惑が渦巻いてるといふか、その片鱗が見える感じがしてさ」

半ば反射的に「ふーん」と応えてしまつたけど、何も理解できなかった気がする。今はとりあえず、納得も同意も棚上げしておこう。

「スタバも喫茶店も、まだ早いよね？」

哲朗さんはお腹に軽く手を添えて言う。このまま一階まで降りればスタバはあ

るし、一回外に出てしまえばファミレスもある。線路をくぐって大学側へ出れば、そっちのスタバも選択肢に入れられる。

正面に見えるフードコートは人影がまばらに見えるけど、手前のスタバには既に列ができつつある。店内をサッと見回しても、すぐに座れる気がしない。今から他の喫茶店を探しながら歩いて、どんだん座りにくい時間になってくる。

「向こうのスタバも一杯だろうな」

彼はそう言いながら、スタバの前を素通りする。フードコートの手前で右に曲がった。後ろのサーティワンをチラリと見てみたけど、夏休みっぽい親子連れでそれなりの列ができているらしい。

線路側の出入り口に向かう哲朗さんの背中を追いかけてながら、道中の雑貨やカバンに気を取られて足を止めてしまう。商品から顔を上げると、向こうの方に「無印良品」の看板も見えた。

私が付いてきていないのを察したらしく、哲朗さんはインフォメーションセンターの前で足を止めて振り返った。彼は私の視線を追いかけて、無印の方を指差した。私が頷くと、彼は無印の方へ歩き始めた。

とりあえず、先に化粧水を見て、おやつでも買おう。そこから先は、後で考える。

初出 令和三年一〇月一〇日 noteにて公開